

かつては“織物のまち”として知られていた八王子も、戦後になると首都圏整備法に基づく“市街地開発区域”に指定され、大工場の誘致や工業団地の造成、居住空間の拡大が行われた。と同時に、近隣都市の発達によって、八王子市は多摩地域の中心的、独立都市的性格を徐々に失っていったのである。今や約42万人もの人口をかかえ、20の大学をもつ都市へと成長したが、小売商業の伸張はこれに見合った程発達していない。これは、市域全体から考えると、市内交通の便の悪さ、鉄道沿線、新興住宅地の住民や若者たちは市外に容易に出かけられること、立川・吉祥寺・町田等の商業核の発達によって八王子の商圈が縮小してしまったこと、周辺市町村への大型店の進出などが原因といえる。当市の小売業の内容をみると、年間販売額では「各種商品、織物・衣服」など買回り性の高い業種の停滞傾向と、「飲食料品」を主とする最寄り性の強い業種の伸びが特徴的である。買回り品を扱う度合いが高い商業集積地は、それだけ商業力の強さを示しているとなると、この点も八王子の商業力弱体化の一因としてあげられる。

八王子の中心商業地は、伝統的経営を存続している甲州街道沿い商店街から、駅周辺へと移った。駅ビルによって、小売商店の経営は全般的に悪化し、市内外来街者数も著しい変化はみられていない。ショッピング・モールは来街者には評判がいいようだが、地元商店経営者は業種や駅からの遠近によって良悪が違っていた。若者向けの店（特

に衣料品店など）や駅に近い店は売上げが伸び、大型商品や生鮮食料品を扱う店、駅から遠い店、三和会通り（広い歩道＋一車線分備えたセミ・モール）沿いの商店は、売上げが落ちている。顧客としての一大勢力は若者層であり、八王子の中心商店街では、彼らに受ける商店の集積、同業種や関連業種ごとの集積に欠けている。雨の日の客を逃してしまったアーケードの撤廃、駐車場・駐輪場の著しい不足も、商業集積力の拡大を妨げている要因といえる。

立川市、大宮市、千葉市、八王子市といった4つの周辺都市の中心商店街を比較してみた結果、多くの共通点が得られた。中でも最も重大と思われる問題はアメニティの欠如である。人々は都市に「場所のもつ感じのよさ」を強く求めるようになり、商業第一主義で形成された周辺都市の中心商店街は、都心の高次の商業集積地に比べて、環境の悪さが目立ってきた。都会とふるさととの中間に位置し、平均的な特徴しかもたない周辺都市は、その個性が希薄で、存在意義自体がゆらぎかけている。

八王子市の商業活性化は、こうした状況をふまえて、緑や公園、文化・娯楽施設といった環境の改善や多目的市街地を口指すこと、駐車場・駐輪場の設置、商店立地の再編成、地元商店経営者への援助が必要であろう。中心商店街は、商業発展の中核として、現実に即した積極的な試みを止むことなく続けていかねばならない。

栃木県茂木町の地域的性格に関する考察

吉村尚美

栃木県の芳賀郡東部地域は、県内でも遅れた地域であると言われてきた。特に茂木町は農業以外に基盤となるような産業の見られない、過疎に泣く町である。しかし歴史的には、江戸時代、細川氏の城下町として発展し、明治中期頃には民営たばこ製造の中心地として、他市町村に勝って、活気を呈する地域であった。本論文は、こうした茂木町が、どのような地域的特性を持つのかについて考察してゆくものである。

茂木町は、栃木と茨城の県境を走る八溝山地の

中に位置し、地形的には4つに区分できる。それぞれの地形区で、地質、谷の解析の程度、傾斜などに違いが見られ、したがって、集落形態や、農業的土地利用も異なっている。茂木町南部をほとんど占める鷲足山塊は、中生界の地質から成り、谷の解析は進んでおらず中央にある沖積地が目だつのみになっている。山地の傾斜は急で、山腹の農業的土地利用の可能性は乏しく、集落も、沖積地の端に点々と形成されている。これに対し北東部を覆う鷲子山塊は、第三紀層から成り、谷もあ

る程度の解析が進んでいる。集落は、山地斜面の中の、狭い平坦地を選んで形成されており、その周辺は畑地として利用され、南部地域に比べ、畑率が高くなっている。町の中央部から西部にかけての地域は、地形的には、喜連川丘陵とその連続面と見なされている。谷の解析はよく進んでおり、丘陵面である高度150m付近に、平坦面はほとんど残されていない。緩傾斜地が多く、集落は、沖積地及び斜面、いずれにも形成されており、耕地率も高い。那珂川の段丘地域には、中・下位段丘が見られる。大規模な段丘とは言えないが、茂木町にすれば、数少ない平地であり、現在までたばこの主要な生産地となってきた所である。

地形の制約を受ける茂木町では、芳賀郡内で田の面積は最も少なく、畑作中心の農業が展開されている。農業従事者は全体の1/3を占め、農業が町の主産業となっている。県平均と比較すると、中規模農家の割合が高く、大規模な農家は少ない。

明治中期に、葉たばこの生産においても、民営たばこ製造においても、大生産地として栄えたこの地域では、戦後になっても、たばこに頼った経営がなされていた。が、高度成長期を迎えると、農家人口が流出し、他作物に比べ、著しく労力を必要とするたばこの栽培は、困難になってくる。たばこにかわる作物としては、様々な作物が試みられたが、山間地である点、及び豊かな森林資源を背景に、南部逆川地区を中心にコンニャクが、北東部を中心にしいたけが導入され、昭和40年代

の後半から急激な伸びを記録した。たばこ農家の転作、そして稲作からの転向農家も加えて、現在では、両作物とも県内最大の産地に成長している。南北に分かれて分布したのは、地形、地質条件、及び周辺農家の栽培状況によると思われる。

1986年8月5日～6日にかけて、台風10号による集中豪雨にみまわれ、茂木町では、市街地を2分して流れる逆川が氾濫し、大きな被害が出ている。市街地は、町の7割を覆う逆川とその支流が集中する位置に形成されている上に、もともと集中豪雨の少ない地域であるため、一気に流れ込んだ大量の水をさばききれなかったのである。北部には那珂川が流れているが、直接那珂川に流れ込む河川は少なく、一旦逆川に集められてから那珂川に入ってゆく水系が形づくられており、茂木町内では、那珂川の流域面積は小さい。

最後に交通位置的に茂木町を見てみると、国鉄真岡線の通る恵まれた位置にありながら、この路線が、本線接続でなかった点、及び沿線に中心的都市がなかった点で、その利用価値が低いものにとどまった結果、町の衰退傾向を止めることはできず、いつまでも農業にたよった体制から抜け出せずにいる地域像が浮かびあがる。県の中心となる宇都宮市からも、30kmという距離にはあるが、山間地の道路状況などが原因して、その影響が直接とどくとは言いきれず、住宅地としての開発や、企業の誘致は、地形的、位置的制約を受けて、難しいと思われる。